

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## <史料紹介> テオドシウス法典 (Codex Theodosianus) (13)

著者	テオドシウス法典研究会 代表 後藤篤子
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	59
ページ	23-40
発行年	2003-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10768">http://hdl.handle.net/10114/10768</a>

〈史料紹介〉

テオドシウス法典 (Codex Theodosianus) (一二三)

テオドシウス法典研究会  
(代表 後藤 篤子)

- 一 三二三年(法文①～⑩)(以上『専修法学論集』第五九号「一九九三年九月」)
- 二 三二四年(法文⑪～②②)(以上同六〇号「一九九四年三月」)
- 三 三二五年一月～一〇月(法文②③～④②)(以上同六一号「一九九四年七月」)
- 四 三二五年一月～三二六年(法文④③～⑤⑤)(以上同六三号「一九九五年三月」)
- 五 三二七年～三二九年三月(法文⑤⑥～⑤⑧)(以上『立教法學』第四三号「一九九六年二月」)
- 六 三二九年四月～七月(法文⑤⑨～⑥③)(以上同四五号「一九九六年九月」)
- 七 三二九年七月～一〇月(法文⑥④～⑥⑦)(以上同四七号「一九九七年七月」)
- 八 三二九年二月～三三〇年二月(法文⑥⑧～⑥⑩)(以上同五〇号「一九九八年七月」)
- 九 三三〇年二月～三三一年一月(法文⑥⑪～⑥⑬)(以上同五三号「一九九九年七月」)
- 一〇 三三一年二月～八月(法文⑥⑭～⑥⑯)(以上同五六号「二〇〇〇年八月」)
- 一一 三三一年八月～三三三年四月(法文⑥⑰～⑥⑱)(以上同五八号「二〇〇一年七月」)
- 一二 三三三年五月～三三五年六月(法文⑥⑲～⑥⑳)(以上『法政史學』第五七号「二〇〇二年三月」)
- 一三 三三五年六月～三三六年三月(法文⑥㉑～⑥㉒)(以上本誌)

## (承前)

## ② 第二二巻第一章第一〇法文

同(＝コーンスタンティヌス)帝がマークシムスに  
 〈宣示す〉。

我等は、様々な者たちに対し、軍団や歩兵大隊に配属され、あるいは〈それらの〉職務に<sup>(3)</sup>戻されるよう定めた。それゆえ、この種の恩典を提示しようとする者は誰であれ、参事会員身分の出自かどうか、あるいは以前に参事会への指名を受けていたかどうかを問いただされ、もしこうしたことが証明されたならば、その者の参事会と都市に戻されるべし。こうした原則は、すでに以前に入隊を認められて、軍事職に就いている者や、職務に戻されて、忠誠の誓いにより守られている者、あるいは、今後、推薦によって〈適格であること〉を認定されるであろう者たち<sup>(5)</sup>すべてについて守られることが至当である。

パウリーヌスとユリアーヌスがコーンスルの年の七月一日アンティオキアで掲示す。

(1) Maximus, *PLRE*, i, p. 590 (Valerius Maximus 49)

は、掲示場所を根拠に法文②註(1)の人物と同定する。

(2) cohortes, 法文②註(3)参照。

(3) militia, 皇帝に対する勤務は民政、軍政を問わず、広く militia と表現されたが、より高位の武官・文官の職務をあらわす dignitas と対比される場合には、終身の下級吏職を指す。高官が皇帝からの書簡や小書附 codicillus により任命されるのに対し、下吏は法務官房 sacra scripta か、より下位の管轄部局の認定状 probatoria により任命された。cf. Jones, *LRE*, pp. 377f.

(4) Gothofredus, ad h. l. は、皇帝の勅答、もしくは特許状 rescriptum principis seu indulgentia のこととする。

(5) qui ... per suffragia probabuntur. Gothofredus, ad h. l. は、その前に現れる「入隊を認められて、軍事職に就いている者 probati in militaribus officiis agunt」への参照を求めているが、こゝでの suffragia が何を意味するのか明言はしていない。ただ、同箇所では Gothofredus があわせて参照を求めている本法典第七巻第十三章第一法文は新兵の原籍に関する審査に、また本法典第七巻第二二章第五法文は身体適格審査にそれぞれ言及しており、こうした一連の審査を suffragia の内容として念頭に置いていたのかもしれない。ともあれ、こゝでは suffragia の内容を、この語が法文に現れる時の一般的な意味である「推薦」ととり、「推薦によって〈適格であることを〉認定されるであろう者」と訳した。

## ②04 第二二巻第六章第二法文

同（＝コーンスタンティヌス）帝が三州の帝室財産管理官エウフラシウスに〈宣示す〉<sup>(1)</sup>。

前略。数多く〈の地所〉について、たとえそれらが様々な場所に点在していても、金の負担をまとめて支払うことが認められ、すべての地所について債務証書が発行されることによって保証が与えられること。それは、各々の地所からばらばらに金が徴収されて、頻繁かつ間断のない〈徴収の〉増加によって地方住民の利益が減らされてしまわないようにするためである。

(1) 我等はさらに以下の点をつけ加えるものである。すなわち、何びとかが他の都市において出費を被ることのないように、あるいは、より悲惨なことに、騙されて流質約款<sup>(3)</sup>に陥らないように、各人は、年の終わりにまでに義務を負ったものを、望むときに支払い、また、金はいかなる遅滞もなく受け取られ、〈都市の〉課税台帳管理の下吏によって納税が確認されること。というのも、支払いを望む者が収税人から軽んじられたならば、証人関与のもとで証明を行わなければならないからである。その結果、このことが証明されたならば、流質の拘束から解放された者は、

設定されていた担保を利息とともに受け取るよう、そして収税を拒否した者は課された額の二倍を国庫の会計に支払うよう、貴官の部署の熱意によって強要される。

パウリーヌスとユーリアーヌスがコーンスルの年の八月一九日に付与す。

(1) Eutrasius. この人物は、本法文および法文②にしか現れない。cf. *PLRE*. i. p. 299 (EUPHRAXIVS). なお、Gothofredus, ad h. l. によれば、このでいう三州とは、シチリア、サルディニア、コルシカのことである。

(2) cautiones. 債務証書については、法文④註(2) 参照。

(3) lex commissi. 流質約款については、法文④註(2) 参照。なお、本法文では、私人間の流質約款ではなく、収税人がその立場を利用して納税者に不当に結ばせる流質約款が規制の対象となっている。

## ②05 第二二巻第七章第一法文

コーンスタンティヌス帝が三州の帝室財産管理官エウフラシウスに〈宣示す〉<sup>(1)</sup>。

もしも何びとかがソリドウス金貨で支払うことを望むな

らば、精鍊された金を四スクリーブ<sup>(2)</sup>ム含み、我等の顔を刻印したソリドゥス金貨七枚を金一ウンキア<sup>(2)</sup>について支払うこと。この基準にしたがって、納税者は債務の全額を支払うように。もしも何びとかが金塊で支払うならば、ソリドゥス金貨で支払ったと見なされるように、同じ比率が遵守されること。支払われる金は、平衡の保たれた秤皿と目方が同じ分銅で受領されること。すなわち、紐の先端は指二本で持ち、残り三本の自由な指は収税人のほうへ突き出し、〈指で〉秤を圧し下げることのないようにすべし。その際、計量用の分銅は監視され、平衡かつ釣合のとれた状態で天秤が吊り下げられるようにすべし。後略。

パウリーヌスとユーリアーヌスがコーンスルの年の八月一九日に揭示す。

(1) 法文<sup>(9)</sup>註(1)を参照。

(2) 三〇九年ごろにコーンスタンティヌス帝は、一ローマン・ポンドの金塊から七二枚のソリドゥス金貨を製造するよう定めた。cf. R. T. Ridley, *History of Rome: A Documented Analysis* (Roma, 1987), p. 617. なお「ソリドゥス金貨については、法文<sup>(9)</sup>註(2)も参照のこと。

一ローマン・ポンドすなわち一リーブラ *libra* の重量

については議論があるが、R. Duncan-Jones, *Money and Government in the Roman Empire* (Cambridge, 1998), p. 214によれば「三三二・八グラムほど。一リーブラは一ウンキア、一ウンキアは二四スクリーブムにあたる。なお、本文文では一ウンキア＝二八スクリーブムで換算されているが、これはフランク時代の *interpolatio* によって、本来は「ソリドゥス金貨六枚」だったものが「ソリドゥス金貨七枚」に、「ソリドゥス金貨一二枚」が「ソリドゥス金貨一四枚」に変わってしまったものと考えられている。cf. Mommsen, ad h. l. J.-P. Callu, *La politique monétaire des empereurs romains de 238 à 311* (Paris, 1969), p. 472 n. 6.

## ② 第二卷第一八章第三法文

同(1) (＝コーンスタンティヌス) 帝が首都長官セウェルスに〈宣示す〉。

以下の者には何びとたりといえども、審理が許与されてはならない。すなわち、関連のある紛争を分断して、同一の裁判で判決が下され得た事柄を恩寵に基づく特権により別々の裁判官の面前で弁論することを欲した者が、それで

ある。(今この) 刑罰を揭示したのだから、何びとかが本規定に反して嘆願を行い、占有についてはある裁判官、本権<sup>(4)</sup>については別の裁判官を要請したときには、請求された目的物の完全な評価計算がなされた上で、係争物がその領域内に存在しているその都市の金庫にその五分の一を納入すべし。

パウリーヌスとユリアーヌスがコンスルの年の七月三〇日に揭示す。

(1) Severus. 法文<sup>(8)</sup>註(1) 参照。

(2) *causae continentia*. Gothofredus, ad h. l. によれば、「紛争の関連性・接続性」とは、例えば訴訟が所有権と占有に関して争われるときに、訴訟は一つであるが、二つの主題 *capita* を含む紛争 *causa* が接続し、関連していることをいう。

(3) *poena proposita*. この絶対的奪格を、Gothofredus, ad P. I. はそのように理解しているが、「刑罰が(すでに)公にされている以上」とも理解可能である。

(4) *principalis quaestio*. 占有が事実上の支配関係として一応独立に保護されるのに対し、所有権のような、占有を正当づける実質的な権利をいう。Gothofredus, ad h. l. は、「所有権に関して *de proprietate*」を「本権に関して

*super principali quaestione*」と同義としている。  
(5) *rei publicae eius civitatis*. については意味をとってこのように訳した。

## 207 第一卷第五章第一法文

コンスタンティヌス帝が道長官コンスタンティウスに〈宣示す〉。

我等は、告示によってすべての地方住民に次のことを想起させたい。すなわち、彼ら自身の総督に異議を申し立て、軽んじられたならば、彼らは貴官に異議申し立てすべきことをである。貴官は、こうしたことが総督の過失や怠慢によって引き起こされたとき、ただちに我等の知るところとなすように。そうすることで、彼ら(総督)は適切に矯正され得よう。

パウリーヌスとユリアーヌスがコンスルの年の八月二九日アンティオキアで付与す。<sup>(3)</sup>

(1) 写本では *p(raefectum)u(rb)* となっているが、*Mommsen* 及び *p(raefectum) [praetorio]* と補つ。Seeck, *Re-gesten*, p. 115 及び、内容が州行政に関わるものであること

からこれを支持し、また *PLRE. i. p. 225* (Fl. Constantius) は、法文<sup>⑧</sup>註(一)の道長官 Constantius と同定する<sup>29</sup>。

(2) III K. SEPT. 別の写本では sept. ではなく octb. となっており、*Seeck, Regesten, p. 175* や *PLRE. i. p. 225* は、これらの日付(すなわち九月二十八日)を採用している。

(3) *Seeck, Regesten, pp. 9, 115, 175* はコーンスタンティヌス帝が七月二五日に即位二〇周年をニコメデーアで祝ったことから、アンティオキアで付与することは難しいと考え、「揭示す (pp)」に読みかえる。*PLRE. i. p. 225* もこれを支持する。

## 208 第一一巻第三十九章第一法文

コーンスタンティヌス帝がアウレリウス・ヘッラディウスに<sup>(1)</sup>〈宣示す〉。

たとえ古法の規則や先帝たちの勅答が、原告が請求する物に関する訴訟において原告に立証の必要を課していたとしても、我等は、衡平と正義に動かされて以下のように命ずる。すなわち、この種の事案<sup>(2)</sup>が発生したときは、初めに法準則に従って、いかなる経緯でその物が自身に帰属する

のかを原告が立証するべきである。しかし原告側が立証に失敗した場合には、そのとき初めて、いかなる経緯で占有しているのか、あるいはいかなる権利に基づいて保持しているのかの立証の必要が〈被告たる〉占有者に課されるべきであり、このようにして真実が吟味されるべきである。

パウリーヌスとユーリアーヌスがコーンスルの年の九月一七日ナイッスス<sup>(3)</sup>で付与す。

(1) Aurelius Helladius. 法文<sup>⑧</sup>註(一)を参照。

(2) Gothofredus, ad h. l. によれば、本勅法は、原告が立証責任を負担するとの従来の法準則を改廃するような一般的な内容を含むものではなく、本来は以下のような特殊な事案、すなわち、窃盗その他の不正な権原にもとづいて他人の物を占有しているとされる者に対して所有物返還請求訴訟が提起されたが、原告がその立証に失敗したような事案において、被告が「善き人」としての評価を維持して他人からの嫌疑を免れるように被告にも立証義務を課したものであり、本法典への再録に際してこのような具体的な事案内容が削除されてしまったとされる。

これに対し Kaser は、ローマ法における所有権概念の発展を、事実上の物支配としての第一段階、当事者間で占有へのより良き権利が問題とされる「相対的所有権」と

しての第二段階 (legis actio sacramento in rem の導入以降)。ただし Kaser は「占有へのより良き権利を「相対的所有権」と呼ぶことをのちに放棄している」° cf. Kaser, 'Über "relatives Eigentum" im altrömisches Recht, in: *Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte. Romanist. Abt.* [以下 ZSS] 102 [1985], p. 24.」° 基本的には今日の所有権と同一の「絶対的所有権」としての第三段階 (紀元前二—一世紀以降) と捉えた上で (cf. Johannes Michael Rainer, Max Kaser und die dinglichen Rechte, in: ZSS 115 [1998], pp. 161-163) 被告にも立証責任を課している本勅法の特殊性は「所有権を再び「占有へのより良き権利」として捉える卑俗法的理解から説明される」としてゐる° cf. Kaser/Hackl, *Das römische Zivilprozessrecht* [法文⑩註 (3) 所引], pp. 597f.; Kaser, *Das römische Privatrecht* II [法文⑩註 (2) 所引], p. 292.

- (3) Seeck は「コンスタンティヌス帝が当時ナイッスス Naissus に滞在することは不可能であるとして、本勅法はカルケドーンとニコメデーアの間にあるナッセテ Nasete で付与されたが、破損や改竄によって付与地がナッセテ Nasete からナイッスス Naissus に変えられてしまっている」と解する。また、法文⑩に再録された勅法が同日にニコメデーアで付与された可能性もあるとした上で (法文⑩註 (2) 参照)、本勅法と法文⑩の勅法が同じ日のうちにナッセテとニコメデーアで付与され

ることは「両地の距離関係からも可能である」としている。° cf. Seeck, *Regesten*, pp. 9, 109, 115. なお Barnes, *New Empire*, p. 76 も「本勅法の付与地をナッセテと解している」。

#### ⑩ 第九卷第一章第四法文

同 (＝コンスタンティヌス) 帝がすべての地方住民に〈宣示す〉。

いかなる地位、身分、位階の者であろうと、総督、総監、余の友人、余の宮廷官吏のいずれかに関して、不正かつ不法に行われたとみられる何かを誠実に公然と立証できる自信のある者がいるときは、堂々と安んじて近づいて余に訴えるべし。余自身がすべてを聴聞し、余自身が審理し、もし証明されたときは、余自身が処罰するであろう。

〈その者は〉語るべし、安んじて自らの正しさを自覚して語るべし。余が述べたように、もしその者が立証したときは、清廉を装って今日まで余を欺いていた者を余自身が処罰し、他方、このことを告発し証明した者を位階と財産によって賞賛するであろう。かくして余は望む、最高神格がつねに余に慈悲深くあって余を無傷に守り、国家がきわめ



て幸福で繁栄せんことを。<sup>(1)</sup>

パウリーヌスとユリアーヌスがコンスルスの年の九月一七日ニコメデーアで揭示す。<sup>(2)</sup>

- (1) Gothofredus, ad h. l. は、この時期にコンスタンティヌス帝の子クリスプスが彼のもとに告発されて、後に処刑され多くの友人たちも殺害されているが、そのことと本勅法との関連は認められず、むしろ本勅法には皇帝伝作者たち、とりわけ、写本の伝承では *Scriptores Historiae Augustae* の六人の著者の一人で、コンスタンティヌス帝の対リキニウス戦勝利後に帝の求めでエラガバルス伝やセウエールスアレクサンデル伝を書いたとされる、Lampridius (特に *Sen. Alex.*, 66i.) の影響が認められるとする。しかし今日では、*Historia Augusta* は四世紀末(ないし五世紀初頭)に一人の著者によって書かれたとする見方が有力である。cf. *The Oxford Classical Dictionary*, 3rd ed. (Oxford, 1996) [以下 *OCD*], s. v. [Historia Augusta]. 本勅法の表現はむしろ、ニーケーア公会議後間もないコンスタンティヌス帝の高揚した気分の反映であろうか。

- (2) Gothofredus, ad h. l. は、コンスタンティヌス帝が三二三年にニコメデーアに滞在して彼の即位二〇周年を祝っていることなどから、本勅法が同地において付

与・揭示されたものと考え、Seeck, *Regesten*, p. 9 も、七月二五日に同地で即位二〇周年が祝われたことを理由に本勅法の付与日・揭示日がともに九月一七日であった可能性を指摘している。なお、Barnes, *New Empire*, p. 76 は、法文<sup>②</sup>が九月一七日にナッセテで付与されたと解した上で、コンスタンティヌス帝がその直前の九月一五日頃までニコメデーアに滞在して本勅法を付与したものと推測している。

## ㉔ 第一五巻第二章第一法文

コンスタンティヌス帝が道長官マークシムスに(1)宣示す。

血腥い見世物は市民の閑暇と国内の静穏への時<sup>(2)</sup>にあつては好ましくないものである。それゆえ我等は、誰かが剣闘士たることを全面的に禁止するものであるから、犯した罪ゆえにかかる境遇と判決を得るのが慣わしであった者たちを、貴官は今後むしろ、彼等が血を流すことなく自らの罪に対する刑罰を引き受けるべく、鉞山刑に服さしめよ。

パウリーヌスとユリアーヌスがコンスルスの年の一〇

月一日、ベリニートゥスで揭示す。

- (1) Maximus. Gothofredus, ad h. l.<sup>1</sup> Mommsen, ad h. l.<sup>1</sup> Seeck, *Regesten*, p. 175<sup>1</sup> *PLRE*. i, pp. 590 f. (Valerius Maximus 49) のいずれも、法文<sup>⑩</sup>および法文<sup>⑪</sup>の名宛人と同一人物とし、職名は法文<sup>⑩</sup>の inscriptio にある vicarius Orientis (オリエンヌス管区代官) に訂正すべきと考へる。法文<sup>⑩</sup>註(一)参照。

- (2) Quapropter, qui omnino gladiatores esse prohibemus eos, qui forte delictorum causa hanc conditionem adque sententiam mereri conseruerant, metallo magis facies inservire,... この箇所は文法的に乱れており、剣闘士競技の全面的禁止か、刑罰としての闘技場送りのみが禁止されたのかについて、諸家の見解が分かれている。

Gothofredus, ad h. l. は prohibemus の後をカンマで区切り、qui omnino ...prohibemus は「剣闘士の存在の全面的禁止であると考え」、そこにニケーア公会議に集ったキリスト教教父たちの影響を見る。彼自身が例を挙げているように、剣闘士競技はその後五世紀まで存続するが、その点については、この勅法はベリニートゥスが位置するシュリアーフォニーケー州についてのみ有効であったとす。G. Ville, *Les Jeux de gladiateurs dans l'empire chrétien*, in: *Mélanges d'archéologie et d'histoire*, 72

テオドシウス法典 (Codex Theodosianus) (一三三) (後藤)

(1960), pp. 314-316 は「quapropter [qui] omnino...prohibemus」qui を取ったこの箇所を剣闘士競技の全面的禁止とし、続く eos qui 以下を「全面的禁止への付加部分とする。ただし、その後の剣闘士競技の存続については Gothofredus の解釈を斥け、キリスト教教父たちの影響下に発布された本勅法はそもそも実行不可能なものであり、すぐに空文化するか廃止されたと考える。近年では T. D. Barnes, *Constantine and Eusebius*, p. 53 n. 100 が「コンスタンティヌス帝は「剣闘士競技の流血で諸都市を穢すこと」を禁じた」と伝える Eusebius, *Vita Constantini*, 4. 25. 1 も引かれている。この勅法を剣闘士競技の全面的禁止と考へている。

これに対し、この勅法を刑罰としての闘技場送りの禁止と考へる Mommsen (cf. G. Ville, op. cit., p. 316.) のペンクチャーションは「eos を gladiatores esse を含む inservire 両方の意味上の主語と考へているのであろうが、最初の qui を含む解釈するかどうか問題が残る。Mommsen のペンクチャーションと解釈を支持する J. Gascon, *Le rescrit d'Hispellum, Mélanges d'archéologie et d'histoire*, 79 (1967), p. 649 n. 4 は「問題の qui にては、これは本来 iubemus inservire もしくは iubemus te facere inservire の主語節となることを、facies inservire に付けてしまったための混乱と考える。すなわち qui は prohibemus の主語である「我輩」を意味するもので、犯した

罪ゆえに——慣わしであった者たちが剣闘士たることを全面的に禁じる我等は、貴官が今後〈彼らを〉むしろ鉱山刑に服せしめるよう命じる」が本来の文意であったこととなる。J. F. Matthews, *Laying down the Law: A Study of the Theodosian Code* (法文<sup>⑧</sup>註(4)所引), p. 291, n. 32 がこの見解を支持している。

しかし、Gascon の説明でも eos, qui... が何の接続詞もなしに esse と inservire の主語になっているという不自然さは残り、また、本研究会はあるべく Mommsen 版のテキストのラテン語に忠実な訳を心がけているので、最初の qui を、quoscumque に近い意味で取り、本文中のように訳出した。

## ②① 第一二巻第一章第一一法文

同(IIコーンスタンティヌス)帝が道長官コーンスタンティウスに<sup>(1)</sup>〈宣示す〉。

参事会を見捨てて、〈補給役の〉職務による保護へと逃げ込む輩が少なからずいるので、我等は以下のように命じる。すなわち、補給役<sup>(2)</sup>を義務づけられたことが未だ明白でない者はすべて、職務を解かれて、その者の参事会へと戻

されること。その地位と位階に相応しい食糧<sup>(3)</sup>〈補給役〉に今や達している者のみが職務にとどめおかれるように。

パウリーヌスとユーリアーヌスがコーンスルの年の一〇月七日に付与す。

(1) Constantus, 法文<sup>⑧</sup>註(1)を参照。

(2) primipilus, 道長官ならびに州総督の属官 cohortales は、退職後に補給役 primipilus, primipiliarius の肩書を付与されて、自分が勤務していた州で食糧を調達して、補給を必要とする駐屯地に運搬する役目を担わされることがあった。属官については法文<sup>⑨</sup>、補給役については法文<sup>⑩</sup>も参照。ディオクレティアヌス帝の時代から補給役の重要性が増したが、かなりの経済的負担をとまなう役だったため、国庫に対して負債を負う者も多かった。このため四世紀半ば以降になると、補給役を忌避する者も現れるようになったので、補給役を義務づける法が廃布される一方で、同役に課される補給量の上限を規定する法も出されている。cf. Jones, *LRE*, pp. 67, 459, 594-596.

(3) pastui, 前註の補給役は primipili pastus と呼ばれることもあるので、このように補った。

## ②② 第七巻第四章第一法文

コーンスタンティヌス帝が我等の親愛なるフェーリークス<sup>(1)</sup>に挨拶す。

我等の兵士を給養する将校または隊長は、通告書の指示により一日ごとに自らの〈受取る〉義務とされている現物への兵糧〉を倉庫に放置しておくべきではない。それは、管理役もしくは収税役または地区長および倉庫長が現物税を徴収する〈ことができる〉ようにするためである。なぜなら、収穫物さえも使われないままに悪くなり、また腐敗するままにおかれることにより、前記の者が地方住民から現物ではなくて現金で請求することがこのことから生じているからである。それゆえ、書記補および百人隊長補が剣により罰せられた上で、放置された現物の損失は国庫に返還されるべき旨、我等は定めた。なぜなら、地方住民が繰り返される〈税の〉支払いに苦しめられたり、前記の者が自らの職務に見合った現物を一定期日に受取ることを拒絶することで、腐敗した収穫物が兵士に配分されたりする、などということが生じることが許されないのであるから。何びとかがこの罪で逮捕されたときには、その功績によってもその高い地位によっても防衛されるべきではない。

パウリーヌスとユーリアーヌスがコーンスルの年の一〇

テオドンヌス法典 (Codex Theodosianus) (一三三) (後藤)

月一九日アクアエで付与す。

(1) Felix, *PLRE*, i, pp. 331f. (Felix 2) は、三二五―三二六年にどっかの管区代官職を、三三三―三三六年にアーフリカ道長官職を務めた Felix と同定している。

(2) procuratores, susceptores, praepositi pagorum, praepositi horreorum, subscribendarii, optiones. 現物税の徴収は、通例参事会により選任された管理役または収税役により行われた。この者たちはグループごとに分かれ、それぞれ肉、ワイン、大麦などの種類別に責任を負うが、これを直接担税者から徴収したのではなく、地区長の下で当該地域内の収税担当者によって集められた現物を受取った。なお、地区 pagus とは、時代により部族集団を含む居住地を表したり、農村地区や行政区画を表したりし、civitas, urbs, oppidum のように比較的広い地域を示すために用いられ、その長は magister, praefectus, curator, praepositus pagi などと呼ばれた。このようにして集められた現物の配分がどのようになされたのかは不明の部分も多いが、おそらくは参事会選任の役人が当該州内の特定の場所に運搬したと考えられ、当該場所で倉庫長の責任下、公設倉庫に搬入された。そしてこの倉庫長が当該地域の部隊の補給係将校たる筆記補 actuarii、書記補 subscribendarii、百人隊長補 optiones、兵糧係 annonarii に

- 兵糧引換証 *pittacia* と引き換えに引渡し、彼らが各兵士に配分した。三三三年コンスタンティヌス帝は、この者たちに *condicionales* の如き官職ポストを付与して、政府の正規ポストとし、奉職中は人頭税を免除され、ペルフェクティッシミー級 *perfectissimi* とされる存在となった。なお、書記補が百人隊長補と並べて叙述される勅法の他に筆記補とともに述べられる勅法も存在することから、それらは同じものと考えられることも可能であるが、*Gothofredus, ad h. l.* によれば、筆記補は兵士の会計を管理したのに対し、書記補は軍指揮官 (*comes rei militaris* や *dux rei militaris*) の下において、その長の名前で通告書の作成をしていた。この通告書が管理役、地区長、倉庫長に宛てられるのである。これに対し、百人隊長補は、収税役などから現物を要求して、その後で各兵士に配分する役割であった。cf. Jones, *LRE*, pp.456, 458f., 626f.; Berger, *Encyclopedic Dictionary* (法文<sup>②</sup>註<sup>③</sup> 所引), s. v. [Pargus], [Subscribendarius].
- (c) *gladio feriendo*. 剣 *gladius* は皇帝の有する最高指揮権の象徴とされ、*ius* (あるいは *potestas*) *gladii* は、死刑をも含めたすべての刑罰科刑権を意味し、州総督や首都長官に授権することもあり得た。cf. Berger, op. cit., s. v. [Gladius].

## ②13 第二二巻第一章第二二法文

同 (Ⅱコンスタンティヌス) 帝がオリエンス管区代官マールクスシムス<sup>(1)</sup>に〈宣示す〉。

もし何びとかが、大小を問わず、都市に原籍<sup>(2)</sup>があるのに、それ〈への義務〉を避けようとして、住所<sup>(3)</sup>を口実に他の都市に自らをゆだね、このことに関してあるいは請願したり、あるいはいかなる方法によってであれごまかしに頼ることを企て、自身の都市の原籍を軽んじたならば、その者は、両方の都市の参事会員職を引き受けるべし。ひとつ〈の都市〉においては自らの望みのゆえに、もうひとつ〈の都市〉においては原籍のゆえにである。

パウリーヌスとユリアーヌスがコンスルの年の二月二五日に掲示す。

- (1) Maximus, *PLRE* i, p. 590 (Valerius Maximus 49) は、法文<sup>②</sup>註<sup>③</sup> (一) の人物と同定する。
- (2) *origo*. 法文<sup>②</sup>註<sup>③</sup> (二) 参照。
- (3) *incolatus*. 法文<sup>②</sup>註<sup>③</sup> (三) 参照。

## 三二六年

## ㉔ 第二卷第二章第一法文

コーンスタンティヌス帝と副帝が首都長官マークシムスに〈宣示す〉。<sup>(1)</sup>

ローマ市民の地位を失ってラテン人とされた者が、<sup>(2)</sup>その身分のままで日光の恵みから遠ざかった(「死んだ」とき、彼のすべての特有財産は、保護主によって、または、宗族の権利を失っていない保護主の子もしくは孫によって請求されるべきである。ヘラテン人とされた者の〈子には、相続財産に関する争いであるかのように争訟に関わることは認められるべきではない。なぜなら、ヘラテン人とされた〉その者の身分状態が特に論じられるべきであり、彼が付与された自由の恩恵によって、選ばれた者として受け取った身分ではなく、日光の恵みから遠ざかったときの身分が論じられるべきだからである。

正帝自身が七度目にして副帝がコーンスルの年の一月三〇日セルディカで付与す。<sup>(3)</sup>

テオドシウス法典 (Codex Theodosianus) (一二三) (後藤)

(1) Maximus. 法文①註(1) 参照。なお、同時期にくつかの法文の名宛人となっている道長官マークシムスとは別人と考えられている。法文②註(1) 参照。

(2) ラテン人およびラテン権については、法文②註(2)、法文③註(3)を参照。Gothofredus や Kaser は、本法文の interpretatio に依りつゝ、被解放者たるローマ市民がラテン人とされるのは culpa が介在する場合であるとしている。cf. Gothofredus, ad h. l.; Kaser, *Das römische Privatrecht* II (法文⑤註(2) 所引), p. 121, n. 11, p. 508, n. 81. Gothofredus によれば、この culpa とは被解放者による保護主への忘恩行為のことであり、忘恩行為がなされた場合には、ラテン人身分への降格処分、鉋山刑や石切り場・強制作業場への有罪判決、(被解放者と保護主の間の)争いや忘恩行為の態様に応じたその他の刑罰などが課され、きわめて重大な忘恩行為の場合にのみ奴隷身分への降格処分がなされた。

(3) subscriptio に従えば本勅法の付与年は三二六年となるが、名宛人マークシムスの首都長官在職期間が三一九年から三二三年までであることを理由に、コーンスタンティヌス帝が六度目のコーンスルの年、すなわち三二〇年に付与されたものと解されている。cf. Gothofredus, ad h. l.; Mommsen, ad h. l.; Seeck, *Regesten*, pp. 21, 64, 127; *PLRE*, i, p. 590 (Valerius Maximus signo Basilus 48)。

## ⑫ 第九卷第三章第二法文

同(Ⅱコーンスタンティヌス)帝がエウァグリウスに  
 〈宣示す〉。

何びとかが問つきの牢獄と厳しい監視に値すると思われるような過ちもしくは罪を犯したことが露見したときには、その者は官庁で聴取され、犯罪について確認された場合には、牢獄の苦しみ<sup>(2)</sup>を受けるべし。後に連行された者が、同じように官庁で聴取されるべし<sup>(3)</sup>。何となれば、犯された罪の記憶がこのようにして言わば公的証拠のもとに保たれるようになる結果、過度に怒りをしめす裁判官らに、一種の抑制と節度が増えられると思われるからである。

正帝コーンスタンティヌスが七度目にして副帝コーンスタンティウスがコーンスルの年の二月三日ヘーラクレールで付与す。

- (1) Evagrius, *PLRE*, i, pp. 284f. (EVAGRIVS 2) によれば、本法文の発布年である三三六年、および三一九〜三三一年と三三六〜三三七年、道長官の職にあった。法文⑤註

(1) および (4) 参照。

(2) *aput acta*. この表現については、法文⑩註 (4) 参照。

(3) *atque ita postmodum eductus apud acta audiat. Gothofredus, ad h. l.* は、この *eductus* は冒頭の「何びとかが *quis*」と同一人物と取り、被告はまず官庁で予備審問を受け、有罪と判断された場合や自白した場合は収監され、その後、再び牢獄から官庁に連行されて公式に審問される、という手続きを考えている。その場合、最初の聴取は、あるいは単に収監記録を取るためとも考えられよう。

しかし、法文⑩は引致された被告を直ちに審理すべきことを命じる一方で、告発人の一時不在や共犯者の出廷の必要性により、被告がその間「牢獄の苦しみ *poena carceris*」に付される場合の処遇について詳述している。また、*Gothofredus* が「予備審問」の例として挙げている『字説彙纂』第四八卷第三章六節は、盗賊 *latrones* を捕らえた治安責任者 *irenarchae* は、共犯者と犯人隠匿者について *de sociis et receptatoribus* 尋問し (*Gothofredus* はこれを「予備審問」とするわけだが)、尋問結果を書面にして総督法廷に送付すべきことを命じた、アントーニヌス・ピウス帝の勅令に言及している。これらを考え合わせると、この *eductus* は冒頭の *quis* とは別人で、収監者の審理の過程で判明した共犯者等と考えることも可能であろう。従って、本文中では敢えて直訳に留めた。

②16 第九卷第七章第一法文

コーンスタンティヌス帝がアフリカーヌスに<sup>(1)</sup>〈宣示す〉。

姦通をなした女が、酒樓の女主人なのか、あるいは、節度のない酒をたいてい自ら酌するような奴隷の役務に隷属する酌婦なのか、が調べられて、以下のように扱われるべきである。すなわち、もしも酒樓の女主人であるならば、法の縛りからは逃れられない。しかしもし、被告とされる女が酒客に奉仕を提供する酌婦であるならば、その卑陋なるがゆえに告発されることはなく、告発された男たちは自由の身として去ること。なぜならば、恥を知る分別は、法の縛りのもとに留め置かれているような婦人に求められるものであり、他方、生業の卑しさが法の遵守に価する婦人とは思わせないような女は、裁判の厳格さとは無縁の存在とされているからである。

正帝コーンスタンティヌスが七度目にして副帝コーンスタンティウスがコーンスルの年の二月三日ヘーラクレーアで付与す。

テオドシウス法典 (Codex Theodosianus) (一三三) (後藤)

(1) Africanus. この人物は本文にしか現れず、役職も不明<sup>28</sup>. cf. *PLRE*. i, p. 26 (Africanus 1).

②17 第八卷第五章第三法文

同(IIコーンスタンティヌス)帝が道長官アキンデューヌスに<sup>(1)</sup>〈宣示す〉。

郵便馬<sup>(2)</sup>と追加の郵便馬<sup>(3)</sup>を使用する自由が、国家がその目的(II公務に伴う移動)のために食糧ならびに家畜用糧秣を供与している騎士級州総督<sup>(4)</sup>、帝室財産管理官<sup>(5)</sup>、その他の者たちから取り上げられるべし。我等は彼らに対し、任命なしに地方住民たちから何かを徴収することをも容認しない。ただし、使用の必要性が求める場合に、〈皇帝の〉彼らに対する信任が認められたところの者たちのみは除く。確かに、貴官らの事由が求めるとき、公共便は〈汝らの用に〉供されるが、もし汝らにとって、公道から、〈すなわち〉何らかの軍道<sup>(7)</sup>から逃れることが必要になったとき、使用許可証<sup>(8)</sup>がない場合は、汝らは公の郵便馬<sup>(9)</sup>〈のみ〉を用いるべし。しかし、自らの使用に必要な郵便馬だけを適正に、節度をもってである。もし、以上のことが軽んぜられ



た場合、このことに関しては偵察役がすでに派遣されているので、汝らは汝らの評価に傷をつけ、騎士級総督らは危険を冒すことになろう。というのも、地方住民にもたらされる害は、公益に突き動かされている我等の道において、大規模かつ熱意ある準備によっても、やっと二〇頭の郵便馬しか用立てられないということから推測できるのだから。

正帝コーンスタンティヌスが七度目にして副帝コーンスタンティウスがコーンスルの年の二月一日に掲示<sup>(9)</sup>す。

- (1) *Acindynus*. 写本では *Acyndinus* 但 *Gothofredus*, ad h. i. も註で *acindynus* の読みを採用するが、*Mommsen*, ad h. i. が *Acindynus* と修正している。名宛人と同定されるセプティミウス・アキンデューヌスは、三三八年から三四〇年のオリエンヌス道長官。cf. *Gothofredus*, ad h. i.; *PLRE*, i, p. 11 (*SEPTIMIUS ACINDYNUS* 2).

- (2) *agminalis*. 稀な単語で、この法文を含め三カ所、すなわち、三五四年の本法典本巻本章第六法文、『学説彙纂』第五〇巻第四章第一八節第二法文にしか現れない。ここでは、第六法文にも現れる *paraveredi* (次註参照) との対比で、快速輸送 *cursus velox* 用の郵便馬 *veredi* を意味するものと解釈した。なお、三世紀末の法学者アルカ

ディウス・カリシウスは、『学説彙纂』の上引箇所で、家産に課される負担、すなわち、広義の *munera patrimonialia* は、財産に課される負担 *munera possessionis* と、狭義の家産に課される負担 *munera patrimonialia* から構成されており、例として、*agminales equi* は財産に課される負担に、*mulae et angariae atque veredi* は家産に課される負担に属すると述べる。後者が家産に対して課される、付属財産の供出という形で負担とすれば、その例として列挙された *mulae et angariae atque veredi* は、本来郵便使用ではない家産付属の役畜の供出と解されよう。しからば、前者はその維持が、財産額に応じて広く土地所有者に課される、郵便の目的に特定された常設馬の提供を指すものと解されてよいのではあるまいか。この解釈は、次註の Jones による *paraveredi* の解釈を前提にした、本訳文における郵便馬 *agminales* と追加の郵便馬 *paraveredi* という対比的解釈に整合的であるが、ただし、アルカディウス・カリシウスが *agminales equi* と *veredi* を区別している事実とは矛盾する。しかし、時代をさかのぼる彼の用語法が、本法典所収の諸法文における、郵便馬を指す術語としての *veredi* の用語法と同じとは限らず、また、*agminales* が、三五四年の本章第六法文を最後に法典中に現れないとすれば、当初郵便用の馬を指していた *agminalis* が四世紀後半以降、*veredi* の語で置き換えられていったと解釈することは可能であろう。

- (3) *paraveredi*. Jones, *LRE*, pp. 833, 1349 n. 22 はこれを、最初から駅通に設置されている郵便馬 *veredi* に対し、追加的に徴発される郵便馬のひとと考える。E. Kornemann, in: *RE*. XXII (1953), s. v. [Postwesen], col. 1006 は、*veredi* が騎手のためにのみ用いられることを許されたのに対し、*paraveredi* は、*parhippi*、*avertarii* と並んで、荷物の運搬にも用いられたと述べている。

- (4) *praesides*. 騎士級州総督については、法文②註(5)を参照。

- (5) *rationales*. 帝室財産管理官については、法文④註(2)および法文⑧註(1)を参照。

- (6) ここに *quibus* という関係代名詞があるのだが、直前に複数形名詞がなく、正確な先行詞が確定できない。このため、「貴官 *gravitas vestra*」に含意される *vos* が、*quibus* で受けられているのだと解釈する。

- (7) *si a publico itinere aliqua militari via devertendum fuerit...* Gothofredus, ad h. l. は、この法文では、公道 *publicum iter* と軍道 *militaris via* が別のものを示していると解釈し、軍道には公共便が組織されていなかったと論じる(次註参照)。しかし、以降の研究は、公道の軍事的な側面が強調されるときに軍道と言い換えられたり、または、公道のうち軍事的な役割を負うものが特に軍道と呼ばれたりしたことを示している。Pascal Stoffel, *Über die Staatspost, die Ochsenspanne und die requirierten Ochsen-*

*gespanne. Eine Darstellung des römischen Postwesens auf Grund der Gesetze des Codex Theodosianus* (Frankfurt am Main, 1993), pp. 84f. は、そこに挙げられた先行文献を参照。従って、ここでの表現が単なる言い換えで、共に *a* に支配された尊格で併置されているものと解釈する。

- (8) *evectio*. 公共便の使用許可もしくは使用許可証のこと。

法文⑧註(3)と、Gothofredus、本法典本巻本章への *paritolum* を参照。ただ、Gothofredus, ad h. l. は、本法文における *evectio* が公共便そのものを指しているとするが、これは彼が公道を軍道と区別して考えることからくる解釈である(前註参照)。

- (9) 註(1)にあるように、アキンデューヌスが三三八年から三四〇年のオリエンヌス道長官であることから、この法は正帝コンスタンティウス二世が二度目にして正帝コンスタンヌスがコンスルスであった三三九年のもので、発布者は帝国東部の支配者コンスタンティウス二世と考えられる。cf. Gothofredus, ad h. l.; Mommsen, ad h. l.; Seeck, *Regesten*, pp. 38, 64, 186.

# 218 第二卷第一〇章第四法文

コーンスタンティヌス帝が首都長官バッススに〈宣示す〉。

以下の弁護人たちは名誉ある人々の団体と法廷の場から排除されるべきことを、我等は命ずる。その弁護人とは、訴訟の法ではなく、地所、家畜、奴隷の質と量を考慮に入れて、それらのうちのめばしいものが強制的な合意を根拠にして自らに譲り渡されるべきことを要求しつつ、犯罪的な恥ずべき合意によって彼らの助けを必要としている者たちから奪って丸裸にする者をいう。

正帝コーンスタンティヌスが七度目にして副帝コーンスタンティウスがコーンスルの年の三月八日コーンスタンティノポリスで付与す<sup>(3)</sup>。

(1) Bassus p.u. 首都長官としてのバッススだとすると、三二七〜三二九年その任にあった Septimius Bassus と同定される。法文④註(1) 参照。しかし、Seck によれば、本勅法が皇帝コーンスル年で示されているが、発布地によってコーンスル年の正しさが確認されること、同一のコーンスル年を有する勅法(本法典第九卷第八章第一法文)がほかに存在することから、本勅法の名宛人の肩書きはイタリア管区代官 vicarius Italiae と推測される。cf. *Regesten*, p. 119. 以下に於て *PLRE*. i. p. 154 (Iunius Bassus

12) は、三二八〜三三一年の在職期間を有するオリエンス道長官のユニウス・バッスス Iunius Bassus とする。

(2) 法文④註(3) 参照。

(3) Seck によれば、発布地のコーンスタンティノポリスに関して、その名称は、三三〇年の奠都式の際に初めて登場したとされていたことがあったが、三二六年に刑に処せられたクリスプスとファウスタの貨幣からすると三二四年からほどなく使用され始めたと考えられる。それに加え、三二六年という年はコーンスタンティヌス帝がマラ海からローマへ赴き、その後東部へ戻っているので、二月三日のヘーラクレーア(本法典の第九卷第三章第二法文および第七章第一法文)、九月二五日のアクイレレイア(第九卷第八章第一法文)、一〇月二三日のメディオラーヌム(第六卷第二章第一法文)、一二月三一日のシルミウム(第一〇卷第一章第五法文)の中に本法文は位置付けられる。cf. *Regesten*, pp. 51, 63, 110, 119.

(未完)

(附記)

今回の担当者は、浦野聡、後藤篤子、芹澤悟、田畑賀世子、林信夫、樋脇博敏である。